

法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

宮古方言における鼻濁音について

著者	ローレンス ウェイン
出版者	法政大学沖縄文化研究所
雑誌名	琉球の方言
巻	36
ページ	1-8
発行年	2012-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10114/11841

宮古方言における鼻濁音について

ウエイン・ローレンス

1. はじめに

琉球列島を踏破し方言を調査した宮良当壮は「…ガ行音の鼻音化現象は九州・琉球方言には珍しいものであるが、…琉球方言の北限の喜界島及び南限の…与那国島だけに発見されるものである」(1961: 372)と書いている。最近では大野(2004: 59)は「琉球諸方言においてガ行鼻濁音を有するのは最西端の与那国方言と最東端の喜界島方言のみである」と同趣旨のことを述べている。これは学界の通説であろう。しかし、実は宮古島のいくつかの方言に鼻濁音(軟口蓋鼻子音)が観察されるのである。

2. 宮古島における鼻濁音の分布と由来

宮古島旧城辺町の方言民話資料(城辺町史編纂委員会 1990)の中で十一名の話者がガ行鼻濁音を使用している。次の例は同書(468-467頁)にある福^{ふくなん}南出身の明治42年生まれの話者から採録された文であり、ŋa と ŋi が二回ずつ使われている。¹

ban-ta-ga jaa-n-na noo-mai njaan, ba-n-na kami-ŋa-nu usika-ŋi-du aa-dara, mma. ui-n-ŋi-du upusu-ŋa-a fumi-kisi numjuu munu-u

「私たちの家には何もない、私には小甕が一個だけあるよ、おばあさん。それ(甕)に潮水を汲んできて(置いて)のんでいるものを」

城辺方言の語彙集である城辺町教育委員会(2004)には buzanŋa「伯父」、bubanŋa「伯母」、utunŋa「弟妹」(62頁)が福里の方言形として、同書43頁に akanŋa「赤ん坊」が長間の方言形として、そして城辺町教育委員会(2003: 57)には utuŋa「弟」が西里添の語形としての記載がみられる。ここの -ŋa は「小さいものに対する愛称」(城辺町史編纂委員会 1990: 662)で、機能的には他方言の -gama に相当する接尾辞である。城辺方言の鼻濁音はこの -ŋa の他に、-ŋaasii, -ŋi, -ŋata の各形式の中に見出される。²

-ŋaasii

fuci-kisi-ŋaasii「先端が切れた」(城辺町史編纂委員会 1990: 537)

pirasi-ŋaasii「注いで」(同上470頁)

nii-ŋaasii「煮て」(同上467頁)

avva-vvja-ŋaasii「油売りをして」(同上444頁)

-ŋi

futakara-ŋi-du「二頭ぐらい」(同上791頁)

vva-ta-mai ssi-ŋi-du uu-dara「あなたも知っているだろう」(同上664頁)

…-nu sjaku-ŋjaa「…の分は」(同上589頁)

nnama-ŋi「今まで」(同上532頁)

-ŋata

nnasi-ŋata-nu「片付けることなのか」(同上793頁)

kii-ŋata-tii「来るだろうと」(同上558頁)

-ŋaasii は「動詞の語尾について「少し～する」, 「ちょっと～する」, 「つつましく～する」, 「ささやかに～する」の意を添える。動作をする人に対する話者の思い(いとおしみ, 哀れみ, 同情等)を添える場合もある」³という。この -ŋaasii は指小辞 -ŋa に従属節目的格助詞 -a が後接した形と動詞「為る」の中止形とに分析できる。⁴

-ŋi は次の例文のように使われる。

noosuttiga jaa-nkai-ŋi vva-ta-a jaa-ju-ŋi jakjuu-ga…

「どうして 家に あなたたちは 家を 焼いているのかね…」(451頁)

anci-nu tuku-nan jukui uu-taacikin-du paziki-ŋi-du ssi

「そのような場所に 休んでいるから(踏まれて)はじけるんですよ」(530頁)

この -ŋi は格助詞の後(jaa-ju-ŋi「家を」)に、そして係助詞の前(futakara-ŋi-du「二頭ぐらい」)に置かれるから、副助詞であろう。宮古方言の副助詞 -gami「まで, さえ」に相当する助詞であると城辺方言話者は認識している。

-ŋata は当然・確信を表す接尾辞で、宮古方言の -gumata / -gamata に当たるものである。

-ŋa が -gama に、-ŋi が -gami に、そして -ŋata が -gamata に対応することから、これらの接尾辞において -gam- が -ŋ- に変化したことがわかる。これが接尾辞に限られる変化であるのは、例えば複合名詞である upusu-fum-gami「潮水汲みの甕」(城辺町史編纂委員会 1990: 472)が *upusu-fum-ŋi にならない事実が物語っている。また、尊敬を表す接尾辞 -ganasi が *-ŋasi にならないのは、-ŋ- の鼻音性は n からではなく、m のみからくことを示す。-gam- > -ŋ- の音変化について二通りの考え方があると思われる。一つは -gam- が徐々に磨耗し、-ŋ- になったという考え方で、-gamV > -gāmV > -ŋāmV > -ŋāV >

-ŋV の一連の変化が想定できよう。接尾辞の g と m の間の a というきわめて特殊な環境に限って母音が鼻母音化すると、鼻母音に後続する音節の頭子音である m の削除の二つの音変化は不自然なものである。⁵ もう一つの可能性として -gam- が一気に -ŋ- に転じたという変化が挙げられる。この変化過程では、母音aの脱落が -gm- の子音連続を生じるが、この連続を回避するために g の調音点と m の鼻音性とは融合して、中間的な音として ŋ が出来たと考えられる。この筋書では、a脱落が g と m の間に限られるのは不自然なところであるが、徐々に変化を重ねる筋書よりは不自然な変化は少ない。このために本稿では -ŋ- は a脱落を通じて -gam- から生じたという立場を採用する。聞こえ度の最も高い母音である /a/ が脱落するのは意外に感じられるかもしれないが、本土日本語の -イツ系の代名詞（こいつ、そいつ 等）における -jatu > -itu, 広島方言の -nasai > -nsai (NHK 広島放送局1991: 13-4), 岐阜市方言の kudasai > kunsæ: (山田 2004: 11), -nasai > -nsæ: (山田 2004: 23) などの例から、少なくとも頻用語形において a脱落が起こりうる事がわかる。また、アメリカ合衆国のアリゾナ州北西部で話されるホワラパイ語 (Hualapai) で、丁寧な話し方で -k-m- と発音される子音連続が日常的な発音で -ŋ- になる (Watahomigie 他 2001: 75) という事実は gm が [ŋ] になる可能性を裏付ける。⁶

城辺町史編纂委員会 (1990) では、-ŋ- は次の旧城辺町の集落（西から東へ）の出身者の談話に現れる — 吉田, 仲原, ^{にしとう}西東, ^{ふくちゅう}福南, ^{ふくきた}福中, ^{あらぐすく}福北, ^{あらぐすく}新城。これに加えて筆者が2011年4月13日から16日の間に実施した現地調査からほかに^{しもなん}花切 (= ^{にしにし}下南), ^{にしちゅう}長間, ^{にしにし}西西, ^{にしちゅう}西中, ^{かじどう}比嘉, ^{かじどう}加治道, ^{ふくとう}ムイゴシ, ^{ふくとう}福東, 福里の各集落出身の方に -ŋa (指小辞) の使用が確認できた。使用が認められない地点として旧城辺町の砂川, 友利, 七又と保良, 旧下地町の与那覇と洲鎌, 旧上野村の 宮国, 野原と新里, および旧平良市の地盛と更竹がある。-gama の使用地点が -ŋa のを囲んで、一見周囲分布をなしていることから、鼻濁音が比較的に新しくできたように見えるが,⁷ しかし、旧平良市の中心地からも鼻濁音が報告されている事実を考慮すると、逆に -ŋ- はそう新しくないという可能性もあると考えられる。

平良五箇の一つである西里の方言資料にも -ŋi (< -gami) が報告されている。以下の例は日本放送協会 (1972) にあるものである。⁸

ban-ta-ga tusi-tu-mai jukai kawaiza si-du [u:ŋja:] sitai-su-ga (180頁)

「私たちの 歳とも 相当に違っていたのではあるが。」

[urju:ŋja] mna arai juuka-di (197頁)

「それぐらひはみんな洗っておくよ。」

fudan-kara ganzjuu futu [a:ŋja:] saatai su-ga-du (198頁)

「ふだんから元気でいらっしゃいました。」

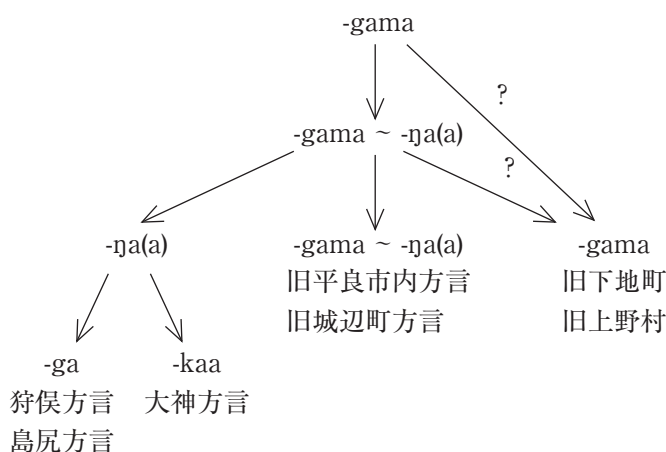
1920年代の宮古方言を記録したネフスキー（2005：656）には「 ηa : (Ps) = gama (диминутивн. суффикс)」とある。訳してこれは「 ηa : (平良) = gama (指小接尾辞)」で、この時期に平良のことばに $-\eta aa$ (< -gama) があったことを物語っている。

宮古島北部には指小辞として $/-ga/$ が存在する。

狩俣	iminka-nu izu-[g]a「小魚」	jarabi-[g]a (～-[ɣ]a)「小さい子供」
島尻	imi-izu-[g]a「小魚」	imi-ffa-[ʔ]a「小さい子供」

この $-[g]a$ (a) は平良系発音の $-\eta aa$ から脱鼻音化してできたと考えられる。すると、 $-gam-$ > $-\eta-$ の変化は相当古い時期におこったということになる。大神島方言の $-kaa$ (日本放送協会 1972：162; Pellard 2009：139-40) もこれと同系に違いない。

指小辞の $-\eta a$ という喚情的な要素の場合、 $-gam-$ > $-\eta-$ の変化が起こった方言からの借用（例えば、平良方言から城辺方言へ、あるいは城辺方言から平良方言への借用）の可能性もあるが、副助詞 $-\eta i$ の場合は借用の可能性は小さくなる。二形式ともが借用される蓋然性はさらに低いといえよう。むしろ、多良間・水納方言群と池間・伊良部方言群を除く宮古諸方言の祖語である宮古島祖語において $-gam-$ が $-\eta-$ に変化したと考えられる。図式的に示すと、宮古島諸方言の指小辞は次のように出来たと想定される。



3. ɲ の音韻的地位

宮古島方言では、同一話者が -gam- の語形と -ɲ- の語形を両方使うばあい、その話者の文法において a 脱落が随意的な共時的過程であると考えられ、母音 a が脱落した場合 -gm- > -ɲ- の変化は自動的に起こるため、ɲ は音素として認定されない。もし話者が専ら -ɲ- の語形を使い、-gam- の語形を使わないが、-gam- の語形を聞き知り、-ɲa が -gama、-ɲi が -gami に対応することを知っている場合、その話者の文法には ɲ の音素はなく、-gam- を義務的に -ɲ- に変化させる規則があると考えられる。一方で、-ɲ- の語形を使い、-gam- の対応語形を知らない話者があるとすれば、その話者の文法において ɲ が音素になっていると考える。

城辺町史編纂委員会（1990）では -ɲi（< -gami）は強調および時間的な限度を表すが、空間的な限度を表す例はない。しかし、実際には空間的な限度の場合、-ɲi は使われるが、⁹ 仮定として、もし -ɲi が空間的な限度を表さない方言があるとしても、それは空間的な使い方の -gami と、その他の -gami（～ -ɲi）が別の語彙項目であることを意味する。しかし、これは片方が /-gami/ で、もう一方が /-ɲi/ であるということには必ずしもならない。-ɲi と交替する -gami は無標の /-gami/ で、交替形のない -gami は a 脱落の適用を受けないという指定を持った /-gami_[-a脱落]/ である。意味・機能に違いがあるといっても、ɲ を音素として想定する必要はない。¹⁰

-ɲaa と -ɲi は平良方言に報告されているのに、-ɲata（適当・確信）が旧城辺町に限定されているのは、-gumata と -gamata の地理的分布にその原因があると考えられる。-ɲa(a) と -ɲi が借用のために宮古島の幅広い範囲で使われるのでなければ、宮古島祖語が広がる前に -gam- > -ɲ- の変化が起こり、-gama ～ -ɲa、-gami ～ -ɲi の二形式並存が生じたと考えるのが妥当であろう。宮古島全島に宮古系言語が広まった後に、宮古方言として古いと思われる -gumata はある地点で逆行同化で -gamata になって、徐々にこの新形が広まったのであろう。新形 -gamata は -gam- 始まりの接尾辞であるために、-gam- > -ɲ- の音変化の適用を受け、-ɲata ができたと考えられる。もし -gamata ができる以前に -gam- > -ɲ- の音変化によってできた ɲ が新しい音素として成立していたなら、その /ɲ/ を歴史的に生じた音韻規則は共時文法から姿を消すことになり、新形 -gamata は -ɲata に変化することはなかったはずである。

謝辞

『城辺町史 第五巻 民話編』の作成に深く携わっていらした砂川裕佐子、本永清、および島尻澤一の諸氏、そして市史編纂資料室の新垣則子氏からは城辺方言と平良方言、就中その鼻濁音語形に関して貴重な助言を賜った。この四方に心から厚く感謝の意を表する。また、平良勝保氏、島尻澤一氏、宮古島市教育委員会の下里典子氏は本研究に役に立つ参

考文献を下さった。記してお礼を申し上げる。

2011年4月13日から16日の間、宮古島の各集落で方言の発音を教えて下さった大勢の方々、特に旧城辺町の西里明長と中野隆作の両氏に、深く感謝する次第である。仲地方言と多良間方言に関してご教示下さった富浜定吉氏と下地賀代子氏にも感謝申し上げる。

また匿名の査読者から有意義なコメントをいただいた。記して感謝したい。

註

- ¹ 本稿では城辺町史編纂委員会（1990）の表記と異なり、a, o: などの替わりに aa, oo などを、そして ji の替わりに si を使う。また、形態素境界はハイフンで示した。
- ² 城辺町史編纂委員会（1990: 422）に ffaŋŋo:mo:ba: という形式が挙げられているが、録音テープを聞いたところ、これは ffaŋŋo:ba: の誤植であることが判明した。ffaŋŋo:ba: は ffa-ŋa-u-ba（子 - 指小辞 - 目的格 - 目的話題）と分析される。
- ³ 以上は砂川裕佐子氏からの私信（2011年2月18日）による。
- ⁴ この構造はほかの宮古方言にも見られ、宮古方言独特の特徴である可能性がある。
 伊良部島仲地方言 naci-gajaa sii「しんみり泣いて、こっそり泣いて」
 biizi-gai asi「そっと坐る」
 池間島方言 hicjaa accjasi-gama-a hii「すこし暖めて」（上里ほか 2008: 158）
 平良市下里方言 niv-gama si-du ui「（子供が）寝ている、（病人が）静かに寝ている」（柴田（未刊））
 多良間方言 sukasi-gama-u sii「なだめすかして」（下地 2006: 169）
 fukum-gama-u sir「（口に）含んでいる」（下地 2006: 232）
 nareesii waar-gama sii「習わせなさる（おかげで）」（下地 2006: 194）
- ⁵ 本誌の査読者は類似の変化として -gama > -gāā > -ŋaa > ŋa がより自然なものとして考えられるのではないかと提案している。しかし、-gami > -ŋi の例が同じ変化過程のために生じたとすれば、その変化は -gamV > -gāV̄ > -ŋaV > -ŋV になる。この一連の変化の最後の変化には動機付けがないように見える。というのは、-gai, -mai, -nai の場合は a脱落は起こらないからである。
- ⁶ ホワラパイ語では -km- のような子音連続は音声的には存在するのに対し、宮古方言では -gm- という音声的な子音連続は許容されることはない。だが、上記の岐阜市方言の kudasai > kunsæ: の変化の例は a脱落によって -ds- という、音声形としては許容されない子音連続が音韻的派生の途中で生じ、先行子音が有声音の場合、それが撥音になって、音声的に許容される発音に修復される。宮古方言の -gam- > -ŋ- はこれと同じように、-gm- は音声的な子音連続として具現化しないが、音韻的派生の中では子音連続

として一時的に存在すると思われる。

- ⁷ 旧城辺町の歌謡に -ŋ- が現れない（城辺町史編纂委員会 2003）ことも -ŋ- が古い発音でないことを裏付ける。
- ⁸ ここでは本稿の表記に統一するために日本放送協会（1972）の音韻表記を少し改めた。音声表記の箇所は音源を聞いて転写した。この作業にあたり、本永清氏と島尻澤一氏から貴重な助言をいただいた。
- ⁹ 新垣則子氏からのご教示による。
- ¹⁰ 西岡（2010: 274-6）は竹富島方言の次の語形を根拠に、竹富島方言に鼻母音が音素として存在することを論じている。

[suburu ~ sũ:ru]「頭」 [hamadʒi ~ hã:dʒi]「髪」 [ʃumu]「内臓」
[suburu]「瓢箪」 [bi:dõ:]「男」 [ʃũ:]「心」

西岡は交替があるものは /-VmV-/、/-VbV-/ で、随意的な鼻母音化が適用することによって音声的な長鼻母音ができると考えているようである。筆者はこれに賛成する。問題は交替しない語形である。西岡は交替しない鼻母音を音韻的な鼻母音とする。では、[suburu]「瓢箪」や [ʃumu]「内臓」のような、-VmV- あるいは -VbV- を含む交替しない語形はどうみればいいのか。西岡（2010）はこのような語形を挙げているものの、その扱い方に関しては言及していない。「頭」や「髪」を意味する語形は随意的に鼻母音化の適用を受けるのに対し、この「瓢箪」や「内臓」を意味する語形にこの規則は適用しない。鼻母音化の共時的現実性を認めるのであれば、「瓢箪」、「内臓」はその適用を受けない例外とせざるを得なくなる。（鼻母音化の共時的現実性を認めなければ、「頭」、「髪」などに二つずつの基底形を想定することになる。）つまり「頭」の /suburu/ に対して、「瓢箪」の基底形は /suburu_[-鼻母音化]/、すなわち、鼻母音化規則の適用を受けない標識を持った（換言すれば、有標な）suburu になる。[bi:dõ:]「男」、[ʃũ:]「心」など、交替しない鼻母音含有語形は同じ鼻母音化規則の適用を随意的にではなく、義務的に受けることになるため、[+鼻母音化] の標識をもっていると考えられる。そうすれば、以上の各形式の基底形は以下のようになり、鼻母音を音素として設ける必要はないといえる。

/suburu/「頭」 /hamazi/「髪」 /sjumu_[-鼻母音化]/「内臓」
/suburu_[-鼻母音化]/「瓢箪」 /biidomo_[+鼻母音化]/「男」 /sjumu_[+鼻母音化]/「心」

宮古島方言の鼻濁音の扱いも同様である。

参考文献

- 上里 武・本村 満・吉浜朝栄 2008. 『写真で追う池間島のミャークツツ』
大野眞男 2004. 「北奄美周辺方言の音韻の特徴」『岩手大学教育学部研究年報』63.51-70.
城辺町教育委員会（編）2003. 『ぐすくべの方言語彙（上）』

- 城辺町教育委員会（編）2004.『ぐすくべの方言語彙（下）』
- 城辺町史編纂委員会（編）1990.『城辺町史 第五巻 民話編』
- 城辺町史編纂委員会（編）2003.『城辺町史 第六巻 歌謡編』
- 柴田 武（未刊）.「宮古方言語彙」.（「宮古音声データベース」として <http://133.13.160.25/rlang/myk/index.html#sh> に公表）
- 下地賀代子 2006.『多良間方言の空間と時間の表現（資料編）』未公開博士論文. 千葉大学.
- 西岡 敏 2010.「竹富方言の音韻解釈 ― 対立・代わり語形・アクセントの側面から ―」
『琉球八重山方言の言語地理学的な研究』271-279. 科学研究費補助金（基盤研究B）研究成果報告書（課題番号 19320068）.
- 日本放送協会（編）1972.『全国方言資料 第11巻 琉球編II』東京：日本放送出版協会.
- NHK広島放送局 1991.『今じゃけえ広島弁』東京：第一法規.
- ネフスキー、ニコライ・A. 2005.『宮古方言ノート 複写本（上）』沖縄県平良市教育委員会.
- 宮良当壮 1961.「方言の実態と共通語化の問題点 沖縄先島」東条操（監）『方言学講座 第四巻 九州・琉球方言』358-378. 東京：東京堂.
- 山田敏弘 2004.『みんなで使おつけ岐阜のことば』岐阜市：まつお出版.
- Pellard, Thomas 2009. *Ōgami : Éléments de description d'un parler du sud des Ryūkyū*.
Thèse de doctorat non publiée. École des hautes études en sciences sociales. Paris, France.
- Watahomigie, Lucille J., Jorine Bender, Philbert Watahomigie Sr., and Akira Y. Yamamoto. 2001. *Hualapai reference grammar (revised and expanded edition)*. Osaka: ELPR (ELPR publications series A2-003).